筑紫女学園大学リポジト

Jinabhadra on Perception (pratyak☒a)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宇野, 智行, UNO, Tomoyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/295

ジナバドラによる直接知（pratyakṣa）の再編成

宇　野　智　行

Jinabhadra on Perception (*pratyakṣa*)

Tomoyuki UNO

0．序

ジャイナ教論理学の伝統において最後期に位置するヤショーヴィジャヤ（17世紀）は、『ジャイナ・タルカバーシャー』(*Jainatarkabhāṣā*) において「直接知」(pratyakṣa) という語の派生説明を次のように提示している。

> 【第１解釈】'akṣa' とは感官（indriya）であり、それに関与する（pratigata)、すなわち結果として［感官に］依存しているものが「直接知」である。
>
> 【第２解釈】あるいは、'akṣa' とはジーヴァ（jīva）であり、それに関与する（pratigata）ものが「直接知」である。というのも、['akṣa' とは]「行き渡るもの」すなわち「知という本質によってあらゆるものを覆うもの」であり、『ウナーディスートラ』に基づくイレギュラーな形であるから。[1]

彼の第１解釈に従うならば、直接知とは感官に基づく知であり、第２解釈に従うならば、感官の助けなしにジーヴァ（アートマンと同義）が直接対象を把握する知と理解されよう。一般に古代インドの認識論の常識を鑑みるならば、'pratyakṣa' という語が指し示すものは、感官に基づく認識に他ならない。しかしながら、ヤショーヴィジャヤが言うように、ジャイナ教の特異な認識論では、感官ではなくジーヴァに基づく認識が意図されることがある。

既に佐藤［2005］が指摘しているように[2]、ヤショーヴィジャヤがこの二つの見解を保持しているのは、形式上はアカランカ（８世紀）に従った結果であることは間違いない。アカランカは、直接知を究極的直接知（mukhyapratyakṣa）と世間的直接知（sāṃvyavahārikapratyakṣa）に二分しており、前者をジーヴァによる知、後者を感官（およびマナス）による知と分類した。ヤショーヴィジャヤはこの構造をそのまま継承した上で[3]、上記の二つの派生説明を提示している

と考えられるのである。

しかしながら、この「究極的」「世間的」という二つの分類はアカランカの創意によるものではなく、ジナバドラ（505-609ca.）によって確立されたものと考えられている[4]。さらに、アカランカ自身は ‘pratyakṣa’ という複合語の派生説明を詳細に提示することはなく、ヤショーヴィジャヤの第２解釈の源泉は白衣派の聖典注釈文献に他ならない。このように、ヤショーヴィジャヤの提示する直接知の見解については、アカランカに端を発する論理学の潮流のみならず、聖典注釈の伝統がその根底に窺われ、特にジナバドラが与えた影響は看過することが出来ないのである。

本稿は、白衣派聖典注釈文献群の中でも所謂『バーシャ』と呼ばれる韻文プラークリット注を中心に、‘pratyakṣa’ という語の解釈を概観し、直接知の分類の歴史を明らかにすることを目的とする[5]。とりわけ、『バーシャ』文献の最終形と目されるジナバドラの作品群を考察することにより、直接知分類についての彼の貢献を明らかにしたい。

１．知の分類

『バーシャ』文献を考察する前に、先行研究に基づいて聖典期の直接知説について概観しておこう。既に、Malvania［1949］や宇野（惇）［1965］に明らかにされているように、聖典における知の分類は三つの段階に分割可能である。まず、第１期の段階では、非言語知（mati / ābhinibodhika）・言語知（śruta）・直観知（avadhi）・他心知（manaḥparyāya）・独存知（kevala）[6]の五つが知の分類として提示されるのみである。さらに第２期は、これらの五つを直接知と間接知に再分類する段階である。この第２期において初めて ‘pratyakṣa’ という術語が現れており、五知のうちの後三者がこれに含まれる。すなわち、次のような『スターナーンガ』(*Sthānāṅga*) における分類がこれに相当する。

【『スターナーンガ』における知の分類】[7]

直接知：独存知・非独存知（つまり直観知および他心知）

間接知：非言語知・言語知

この第２期の分類では、感官やマナスに基づく知（非言語知および言語知）は明確に間接知に配当されており、決して ‘pratyakṣa’ とは呼ばれない。‘pratyakṣa’ とは、ジーヴァが直接認識を行う直観知・他心知・独存知の三種に限られるのである。この解釈は、アカランカ以前のジャイナ教認識論において広く認められていたものであり[8]、他学派の ‘pratyakṣa’ 解釈とは一線を画す。したがって、この分類法を本稿では「伝統的解釈」と呼ぶこととする。

感官に基づく知が ‘pratyakṣa’ と理解されるのは、『ナンディースートラ』を代表とする後期聖典の段階であり、Malvaniaや宇野（惇）はこれを第３期として分類している。『ナンディースートラ』では次のような五知の再編が行われている。

【『ナンディースートラ』における知の分類】[9]

直接知：（１）感官による直接知（感官の区別により五種）

（２）非感官による直接知（直観知・他心知・独存知）

間接知：（３）非言語知

（４）言語知

この分類において、五知は基本的には第２期と同様に配当されているが、新たに「感官による直接知」(iṃdiyapaccakkha, *indriyapratyakṣa）という項目が追加されていることに注目しなければならない。この新項目は単にジャイナ教義内からの必然的追加とは考えられない。後期聖典が成立する時代には、感官に基づく認識を ‘pratyakṣa’ とする他学派からの影響は避けられない状況にあったことが窺われる。実際に『アヌヨーガドゥヴァーラスートラ』には、次のような認識に関わる分類が現れる。

【『アヌヨーガドゥヴァーラスートラ』におけるプラマーナの分類】[10]

直接知：（１）感官による直接知（感官の区別により五種）

（２）非感官による直接知（直観知・他心知・独存知）

推理（aṇumāṇa, *anumāna）

類推（ovamma, *aupamya）

証言（āgama）

この分類は、「知」の分類ではなく、「プラマーナ」(pramāṇa）の分類の中に ‘pratyakṣa’ という認識型が包括されていることが特徴的である。『ナンディースートラ』や『アヌヨーガドゥヴァーラスートラ』の成立年代には諸説あるが[11]、少なくとも紀元５世紀半ばまでに、ニャーヤ学派などの奉じる四種のプラマーナ分類の影響を受けていたことは間違いないであろう。すなわち、感官に基づく知を ‘pratyakṣa’ とする他学派に倣って、従来の五知説との融合を図ろうとする試みが為されていたと考えられる。

いずれにせよ、第３期にあたる後期聖典成立の時代には、五知のうちの直観知・他心知・独存知のみならず、感官に基づく知を ‘pratyakṣa’ へ組み込む試みが為されており、ジャイナ教認識論改変の端緒についた時期と考えてよい。また、間接知に分類される「非言語知」(mati：感官とマナスに基づく知）と、直接知に分類される「感官による直接知」(indriyapratyakṣa）が同一のものであるか否かは判然としない。いずれも感官が介在する点には相違がないにも関わらず、直接知と間接知の両者に別々に配当されている。ゆえに、第３期は認識論改変の過渡的な段階であったことが明らかであり、この分類を本稿では「過渡的解釈」と呼ぶ。

以上のような聖典における知の分類は、そのまま注釈文献に継承されていったと考えられる。聖典に対する最初の注釈書である『ニルユクティ』では、「直接知」という語の用例は数少ないが、

それに引き続く『バーシャ』文献群には、‘pratyakṣa’という語がかなりの頻度で現れる。まず、ジナバドラに先立つ『バーシャ』[12]として、サンガダーサ・ガニによる『ブリハットカルパ・バーシャ』(*Bṛhatkalpabhāṣya*)の知の分類は次の通りである。

> 直観知、他心知そして独存知は直接知である。非言語知と言語知は間接知である。
>
> (*Bṛhatkalpabhāṣya* v. 30)[13]

この分類は、聖典第２期と全く同じ分類であり、ジャイナ教独自の＜伝統的解釈＞を継承したものと考えて差し支えない。この＜伝統的解釈＞については、ジナバドラもそのまま継承している。

> そして、これら［五知］のうち、非言語［知］・言語［知］は間接知である。そしてそれ以外［の直観知・他心知・独存知］は直接知である。
>
> (*Viśeṣāvaśyakabhāṣya* v. 88cd)[14]

一方、作者不詳[15]の『ヴャヴァハーラ・バーシャ』(*Vyavahārabhāṣya*)では、次のような分類が見られる。

> さらに直接知もまた二種である。感官から生じるもの（iṃdiyaja, *indriyaja）と感官から生じるものではないもの（非感官から生じるもの）とである。さらには感官から生じる直接知も［色かたちなどという］五種の対象に対して［働く五種類である］と理解すべきである。
>
> (*Vyavahārabhāṣya* v. 4030 = *Jītakalpabhāṣya* v. 10)[16]

当該の言明においては、「聴覚感官」(soiṃdiya, *śrotrendriya）などの語は現れないが、その対象として五種が考えられており、五種の対象を認識する五感官が意図されていることは間違いない。したがって、この分類は『ナンディースートラ』などの第３期の分類を踏襲したものであり、＜過渡的解釈＞の継承例と言えよう。

ところで、ジナバドラは当然『ナンディースートラ』『アヌヨーガドゥヴァーラスートラ』はもとより、先行する『バーシャ』文献を参照し得る立場にある。そして上記の『ヴャヴァハーラ・バーシャ』の韻文は、ジナバドラによって彼の著作『ジータカルパ・バーシャ』(*Jītakalpabhāṣya*)にそのまま借用されている。Mehta [1967: 186] が言うように、『ジータカルパ・バーシャ』は、『ブリハットカルパ・バーシャ』、『ヴャヴァハーラ・バーシャ』、『パンチャカルパ・マハーバーシャ』などの先行『バーシャ』文献から多数の韻文を借用しており、ジナバドラがこの＜過渡的解釈＞についても先師たちからそのまま継承していることは明らかである。すなわち、ジナバドラは聖典における知の分類、先行『バーシャ』文献における知の分類に従い、＜伝統的解釈＞と＜過渡的解釈＞を共に自著に取り入れているのである。

２．‘akṣa’＝ジーヴァ説

上記で考察した＜伝統的解釈＞に従うならば、‘pratyakṣa’とは感官の介在を許さず、ジーヴァのみによって完結する認識に他ならない。このことは、『バーシャ』文献において開始された、‘pratyakṣa’という語の派生説明に確実に反映されている。＜伝統的解釈＞に随順するサンガダーサは、次のように言う。

‘akṣa’ とはジーヴァのことであり、こ［のジーヴァ］に関与して（prati）起こるものが「直接知」(pratyakṣa）である。一方、他のもの（感官・マナス）に基づいて（parataḥ）ジーヴァ（akṣa）に起こるものが、「間接知」(parokṣa）である。

（*Bṛhatkalpabhāṣya* v. 25 = *Jītakalpabhāṣya* v. 11）[17]

この言明では、‘pratyakṣa’ という複合語の派生説明として、後続要素である名詞 ‘akṣa’ を明確に「ジーヴァ」と理解している。したがって、ジーヴァ以外の「他のもの」(para：感官・マナス）に関与することはなく、ジーヴァのみに関与して起こる知を ‘pratyakṣa’ と理解していることは明白である。このサンガダーサの言明についても、ジナバドラはこれを『ジータカルパ・バーシャ』第11偈としてそのまま借用し、サンガダーサに追従している。

この言明に引き続き、ジナバドラはサンガダーサの『バーシャ』に見られない韻文を追加している。

「√aśは『行き渡る』という意味で［使用される］」(*Dhātupāṭha* 5.18）という動詞語根の意味に基づいて、‘akṣa’ は必ずジーヴァであると言われている。［ジーヴァは］知を通じて諸々のものに行き渡るので ‘akṣa’ と［言われるのである］。

あるいは、「√aśは『享受する』という意味で［使用される］」(*Dhāṭupāṭha* 9.51）［という動詞語根の意味に基づいて、‘akṣa’ はジーヴァであると言われている］。なぜなら、［ジーヴァのところへ］やって来るあらゆる実体群はそれ（ジーヴァ）の享受物であるから。そして［ジーヴァはそれらを］享受するから ‘akṣa’ と［言われるのである］。

（*Jītakalpabhāṣya* vv. 12-13）[18]

このジナバドラの言明は、‘pratyakṣa’ という複合語そのものに留まらず、‘akṣa’ という後続要素の派生説明までも考察している。‘akṣa’ の派生は√aśに基づいており、その動詞語根の意味は「行き渡る」もしくは「享受する」である。この二つの意味の提示は、パーニニの動詞語根のリスト（『ダートゥパータ』）そのものであり[19]、ジナバドラは ‘akṣa’ が「行き渡るもの」「享受するもの」という意味であることを文法的に裏付けようと試みているのである。ジナバドラは、『ヴィシェーシャーヴァシュヤカ・バーシャ』においても、このような動詞語根の意味からの考察を行っている。

ものに行き渡る・ものを享受するという属性を備えているから、‘akṣa’ とはジーヴァのことである。こ［のジーヴァ］に関与して（prati）起こる知が「直接知」であり、それは［直観知などの］三種である。

（*Viśeṣāvaśyakabhāṣya* v. 89）[20]

ジーヴァはあらゆる対象を認識し得るものであり、かつあらゆる対象を享受し得るものである。『ヴィシェーシャーヴァシュヤカ・バーシャ』のガナダラヴァーダ章では、ジーヴァは「あらゆる微点（極微が占有する最小空間単位）に至るまで無限の知という様態が集合したもの」と規定されており、いかなる対象もが知というジーヴァの様態によってカバーされることが意図されている[21]。さらに、同章ではジーヴァの存在論証のために、ジーヴァが享受主体（bhoktṛ）であ

ることが強調されている[22]。このように、『ヴィシェーシャーヴァシュヤカ・バーシャ』では、ジーヴァの性格についての見解は上記の派生説明と全く一致しており、‘akṣa’が間違いなく「ジーヴァ」を意味することが意図されているのである。

以上の考察により、ジナバドラの ‘pratyakṣa’ の派生説明に関わる貢献は明らかであろう。彼は、サンガダーサによって開始された ‘pratyakṣa’ の派生説明[23]について、『ダートゥパータ』という権威を考慮した上で、‘akṣa’ という語がジーヴァ（アートマン）を指示し得ることを文法的に正当化した。本稿冒頭に示したヤショーヴィジャヤの第２解釈における「行き渡るもの」という解釈の源泉はまさにジナバドラの言明であり、後代論者たちの派生説明の端緒となっている[24]ことは、ジナバドラの貢献と言わねばならない。

３．‘akṣa’＝感官説批判

サンガダーサおよびジナバドラは上記のごとく ‘pratyakṣa’ の派生説明においては明確に＜伝統的解釈＞を堅持している。このことは、彼らが「‘akṣa’ ＝感官」説を徹底して批判していることからも明らかである。まず、サンガダーサは次のように言う。

> ある人たちは‘akṣa’とは諸々の感官のことであり、それらの認識が直接知である［と言う］。しかしこれは妥当しない。なぜなら、感官は対象を把握するものではないからである。
>
> （*Bṛhatkalpabhāṣya* v.26 = *Jītakalpabhāṣya* v. 14）[25]

ここに言う「ある人たち」とはマラヤギリ注によれば「ヴァイシェーシカ学徒など」である[26]。マラヤギリは、彼の在世時（12－13世紀）に一般的であった「‘akṣa’ ＝感官」説の代表としてヴァイシェーシカ学派を提示しているのであろう。したがって、サンガダーサ自身がヴァイシェーシカ学派を明確に意図していたか否かは判断できないが、当時のジャイナ教以外の学派で「‘akṣa’ ＝感官」説は常識であったことは間違いない。事実、サンガダーサ（５－６世紀）に近接する他学派の論者では、ヴァイシェーシカ学派のプラシャスタパーダが『プラシャスタパーダ・バーシャ』に、仏教僧ディグナーガが『ニャーヤムッカ』に ‘akṣa’ ＝感官説を展開している[27]。いずれにせよ、サンガダーサは「感官は対象を把握するものではない」という点を理由に、‘akṣa’ ＝感官説を退けており、ジナバドラもこの韻文を『ジータカルパ・バーシャ』にそのまま借用している。ジナバドラは、『ジータカルパ・バーシャ』での引用だけに留まらず、『ヴィシェーシャーヴァシュヤカ・バーシャ』においても、同じ韻文のcd句に改変を加えて‘akṣa’＝感官説批判を展開する。

> ある人たちは、‘akṣa’ とは諸々の感官のことであり、それらの認識が直接知である［と言う］。それは妥当しない。なぜならそれらは非精神的なものであるので、［対象を］知ることはないからである。瓶のように。
>
> （*Viśeṣāvaśyakabhāṣya* v. 91）[28]

ジナバドラが新たに加えたことは、「感官は非精神的（acetana）であるから」という理由である。精神性を持たない、つまり物質と考えられる感官は認識の主体とは言えない。さらに『ジータカルパ・バーシャ』では、ジーヴァが死んでいる場合、物質的な感官が認識活動を行うことが

ないということが主張されており[29]、感官の物質性とジーヴァの精神性を対比させる考察が付加されたと言ってよいであろう。ジナバドラは、認識主体としてはどこまでもジーヴァを予想しており、精神性を持たない（acetana）感官による知は ‘pratyakṣa’ とは言えないのである。

サンガダーサは先ほどの言明に続いて、感官が対象把握の主体、認識の主体ではないことをさらに強調する。

【主張】実に諸々の感官は認識を持たない。

【証因】[それらが] 損なわれても、対象を想起することがあるから。

【喩例】家の丸窓などのように。

想起する主体こそが認識する主体なのである。

（*Bṛhatkalpabhāṣya* v. 27 = *Daśavaikālikabhāṣya* v. 39）[30]

当該の韻文は、『ダシャヴァイカーリカ・バーシャ』にもアートマンの存在論証の文脈で登場する。すなわち、ジーヴァ即身体説（tajjīvataccharīravāda）に対する批判として、身体の一部である感官は認識主体ではないことを論証するものである。この論証式はジナバドラも、当該箇所およびジーヴァ即身体説批判の箇所において継承している[31]。「想起」(anusmaraṇa) という精神活動は感官の助けなしに生じ、またその活動の主体はジーヴァに他ならない。室内から丸窓を通じて景色をながめた場合、たとえ窓を閉じたとしてもその景色を想起することができる。これと同じように、感官が機能を停止していても、過去に感官を通じて認識した対象を想起することは可能であり、その想起の主体はジーヴァに他ならない。このように、想起という認識活動を理由に、物質的な感官は認識主体とは言えず、‘akṣa’ は感官ではないのである。

『バーシャ』文献における ‘akṣa’ ＝感官説の批判は最終的には推理知（anumāna）との対比によって行われる。すなわちサンガダーサは次のように言う。

たとえば、煙を根拠とする火についての知は、証相に基づく知（laiṅgika：推理知）であるように、感官などを証相とする知がどうして証相に基づく知でないことがあろうか。

（*Bṛhatkalpabhāṣya* v. 28）[32]

一般にジャイナ教も含めて、推理という認識型を「直接知」に含める学派は存在しない。山に煙を見てそこに火の存在を推理する場合、たとえ ‘akṣa’ を感官と理解したとしても、その推理知が ‘pratyakṣa’ と理解されることはないであろう。当該の韻文では、このような推理知と感官に基づく知に、証相(liṅga)という「介在物」がある点で共通性を見いだしている。推理の構造は、当然ながら証相を通じた証相保持者の知であり、最終的な火の知は「煙」という証相を介在した形で生じる。つまり、「証相に基づく知」と同様「感官に基づく知」も ‘pratyakṣa’ ではなく ‘parokṣa’ ということになる。この議論はジナバドラによって次のように説明される。

「証相」(liṅga)、「目印」(cihna)、「根拠」(nimitta)、「原因」(kāraṇa)、これら［の語］は同義である。ジーヴァが諸感官を通じて［対象を］知るのは、煙［という証相］を通じて火［を知るのと］同様である。

（*Jītakalpabhāṣya* v. 17）[33]

サンガダーサが言うような「感官が証相である」「感官を証相とする」という事態は、当然のことながら理解に困難を来す。ジナバドラは上記のように、推理知に必要な「証相」と呼ばれる要素についての同義語を列挙し、サンガダーサの言明をより理解しやすく説明していると言える。すなわち、「感官を根拠とする知」や「感官を原因とする知」は、「煙を証相とする知」「煙を目印とする知」と同じ構造であると言うのである。確かに煙は、推理において証相であり、目印であり、根拠であり、原因でありうる。これらの同義語が示す「煙」が介在物となって火の知が起こり、同じように感官が介在物となって対象の知が生じる。このようにして、'akṣa' は感官ではあり得ず、感官に基づく知は間接知であると結論づけられるのである。

サンガダーサおよびジナバドラのこの議論についての結論は次の通りである。

> 他のものに依存しない（aparāyatta）知が直接知であり、直観知などの三種である。他のものに依存する知は、すべて間接知である。
>
> （*Bṛhatkalpabhāṣya* v. 29）[34]

> 実に以上のように諸感官を通じて［対象を］認識する［知］は、証相に基づく知である。したがって、'akṣa' は聴覚感官などの五つの感官ではないことが成立した。
>
> （*Jītakalpabhāṣya* v. 18）[35]

> 【主張】ジーヴァにとって非言語知と言語知は間接知である。
>
> 【証因１】他のものを根拠とするから。
>
> もしくは
>
> 【証因２】以前に認識した関係の想起に基づいて［生じる］ものであるから。
>
> 【喩例】推理のように。
>
> （*Viśeṣāvaśyakabhāṣya* v. 94）[36]

他のものに依存して、すなわち感官などに基づいて生じる知は、間接知であり、推理同様に介在物がある。'akṣa' はジーヴァを指し、既にサンガダーサが述べたように、他のものに基づいて（parataḥ）ジーヴァ（＝akṣa）に生じる知は、直接知ではなく間接知となるのである。

以上、ジナバドラに至るまでの『バーシャ』文献を考察したが、'pratyakṣa' という語の派生説明は、どこまでも＜伝統的解釈＞に従っていることが明らかとなった。ジナバドラは、先師たちの派生説明に対して若干の付加を行いながらも、'pratyakṣa' という語の解釈については＜伝統的解釈＞を超えることはなかったのである。

４．『ヴィシェーシャーヴァシュヤカ・バーシャ』における再編成

既に述べたように、ジナバドラを含む『バーシャ』作者たちは、＜過渡的解釈＞に全く気づいていなかったわけではない。'pratyakṣa' の語義については＜伝統的解釈＞に沿った説明を加えながらも、これを＜過渡的解釈＞と整合させることを課題として残していたことは間違いない。そしてこの両者の整合性確保という仕事は、ジナバドラの『ヴィシェーシャーヴァシュヤカ・バーシャ』によって果たされる。彼は次のように言う。

証相に基づく知（laiṅgika：推理知）は絶対的に間接知である。そして直観知などは［絶対的に］直接知である。感官とマナスによって生じる［知］は、世間的直接知である。

（*Viśeṣāvaśyakabhāṣya* v. 95）[37]

この言明における「絶対的に」(egaṃteṇa, *ekāntena）という語の使用は、韻文後半の「相対性」を予測させる。すなわち、上記に現れる知は、（１）推理知、（２）直観知など、（３）感官とマナスによって生じる知、の三種であり、（１）は間接知、（２）は直接知であり、この二者の扱いについては、絶対的に覆ることはない。しかしながら、（３）については、「世間的直接知」と扱われながら、相対的に別様に理解される可能性を残す。これらの三種のうち前二者について、まずジナバドラは自注において次のように述べる。

（１）推理知について

しかしながらこの場合、感官やマナスを通じて、外部にある証相に基づく知が生じるならば、この知は諸感官やアートマンにとっては絶対的に間接知である。推理であるから。煙に基づく火の知のように。

（*Viśeṣāvaśyakabhāṣyasvopajñavṛtti* on v. 95）[38]

（２）直観知などについて

さらに、直観知などはアートマンにとって絶対的に直接知である。証相を持たないから。諸感官にとっての証相を持たない知のように。

（*Viśeṣāvaśyakabhāṣyasvopajñavṛtti* on v. 95）[39]

これらの言明においては、まず「諸感官やアートマンにとって」「アートマンにとって」という語に着目しなければならない。（１）の場合、感官やマナスとは異なる外部の証相に基づいて証相保持者の知が生じることを意図しており、推理知そのものと言える。つまり、

対象（火）―― 証相（煙）―― 感官・マナス ―― アートマン

というように、「諸感官にとって」は証相が介在し、「アートマンにとって」は証相および感官・マナスが介在する。既に述べたように、「他のもの」に基づくものはすべて間接知であるので、「諸感官やアートマンにとって」「他のもの」である証相が介在するならば、絶対的に間接知であると判断されるのである。

（２）の場合、直観知はアートマンの直接認識に他ならず、「アートマンにとって」証相や感官などが介在することはない。すなわち、「アートマンにとって」他者の介在は何らあり得ず、絶対的に直接知と理解される。これらの判断は、対象とアートマンや感官との間に「他のもの」が介在するか否かに基づいたものと言える。したがって、この基準に照らせば、感官に基づく知については相対的判断にならざるを得ない。ジナバドラはこの相対性について、次のように言う。

（３）感官とマナスによって生じる知

さらに、直接的に感官とマナスを根拠とする［知］は、それら（諸感官とマナス）にとってのみ直接知である。証相を持たないから。アートマンにとっての直観知などのように。しかしながら、このような知は、アートマンにとってはそうではない(直接知ではない)。

そうではなくて、アートマンにとってそれ（知）は間接知に他ならない。「他のものを根拠とするから。推理のように。」と既に述べられている。それら（諸感官とマナス）にとってもまた、世間的観点からのみ直接知であり、究極的観点からはそうではない。

（*Viśeṣāvaśyakabhāṣyasvopajñavṛtti* on v. 95）[40]

感官とマナスを根拠とする知は、当然自身以外に証相という外界の介在物を持たない。したがって、「それらにとって」は直接知である。ところが「アートマンにとって」は、感官・マナスが介在する。すなわち、

対象 —— 感官・マナス —— アートマン

というように、感官・マナスから見れば介在なく直接的に知が生じているが、アートマンから見れば感官・マナスが介在した形で知が起こる。感官・マナスを根拠とする知は、このような介在物の存否により相対的に、直接知もしくは間接知に配当されるのである。

また上記の言明の「世間的観点から」(saṃvyavahārataḥ)「究極的観点から」(parmārthataḥ)という言葉にも注目すべきである。ここにいう究極的観点とは、もちろんアートマン（ジーヴァ）から見た観点に他ならない。究極的にはジーヴァが認識主体であるということは、ジナバドラが既に ‘akṣa’ の解釈の際に何度も強調してきたことである。一方、世間的観点とは、他学派の影響の元に生まれた＜過渡的解釈＞に言う「感官によって生じる直接知」を正当化する観点であり、感官・マナスから見た立場であろう。これら二つの観点は、次のように纏められる。

究極的観点（＝ジーヴァ／アートマンから見た立場）
　直観知など三種のみが直接知
　非言語知・言語知は間接知
世間的観点（＝感官・マナスから見た立場）
　非言語知・言語知は直接知
　推理知は間接知

このような観点の区別はジャイナ教内部から言うならば、「究極的ナヤ」と「世間的ナヤ」というナヤの二分法[41]を根拠にしている可能性があり、世間一般に認められている見解に随順する立場が世間的観点とも言えよう。ジャイナ教独自の立場としては、ジーヴァによる知のみが「直接知」であり、世間一般（ジャイナ教以外の他学派）の立場としては、感官・マナスによる知を「直接知」と理解する。このように、ジナバドラはジャイナ教の究極的な立場と、他学派をはじめとする世間的な立場を分割することにより、＜伝統的解釈＞と他学派の影響を受けた＜過渡的解釈＞を融合させることに成功しているのである。

ただし上記の分類では、推理知の位置づけ、すなわち非言語知・言語知との関連が未だ明確でない。後代の注釈者マラダーリ・ヘーマチャンドラは「推理知はマナスを根拠とするもの」と述べているが[42]、結局は証相という介在物のゆえに間接知であることが強調されているのみである。またジナバドラは、推理知の分類について明確に言明することはなく、マナスによる知について次のように述べる。

したがって、感官による知が直接知であると述べられていても、非言語知と言語知の両者が間接知であると述べられていることに基づいて、「間接知」であることが理解される。これと同じように、非言語知と言語知が間接知であることが述べられていることのみに基づいて、マナスを根拠とする［知］について何も述べられていないにも関わらず、それら（非言語知と言語知）に含まれるので「間接知である」と理解されるのである。

（*Viśēṣāvaśyakabhāṣyasvopajñavṛtti* on v. 95）[43]

『ナンディースートラ』などには確かに「感官による直接知」という語が述べられているが、「非言語知と言語知は間接知」と規定されることに基づいて、究極的には間接知であると理解されるとする。『ナンディースートラ』には「マナスによる直接知」という言葉は存在せず、マナスによる知については何ら述べられない。しかしながら、マナスによる知が非言語知・言語知の区分に含まれることは確実であり、ジャイナ教の立場では「間接知である」と言うほかない。このマナスによる知に推理知が含まれるか否かについては判然としない。ジナバドラは、これ以上の説明を加えることはないので、推理知が非言語知・言語知の区分に含まれる可能性があるにせよ、その位置づけに難を残していることは否めないのである。

いずれにせよ知の分類について究極的・世間的という二分を適用するのは、ジナバドラの貢献と言う他ない。推理・類推・証言などの他学派がプラマーナと認める認識型の分類については、アカランカ以降の論師の努力を待つほかないが、このジナバドラの二分法が確実に後代論者に引き継がれていることは間違いないのである[44]。

5．ジナバドラ以後

ジナバドラによる知の分類についての貢献は、上記の考察により明らかであるが、本稿冒頭に述べたヤショーヴィジャヤの ‘pratyakṣa’ の派生説明に至る経緯について最後に付言しておきたい。佐藤[2005: 76-77]によれば、ヘーマチャンドラ・スーリ（11－12世紀）は、‘akṣa’＝ジーヴァ説、‘akṣa’ ＝感官説の両論を併記しており、ヤショーヴィジャヤの先鞭となっていることが明らかにされている。しかしながら、佐藤[2005]ではこの両論併記の創始者が誰かについては保留されており、今後の研究が待たれていた状態にあった。

既に述べたように、ジナバドラや彼に先行するサンガダーサは、‘akṣa’ ＝ジーヴァ説のみを支持し、感官と理解することはないことが明らかとなった。ゆえに、『バーシャ』作者は両論併記の創始者とは考えられない。この両論併記は、現在筆者が知る限り次のような作品に登場する。

【ジナダーサガニ・マハッタラ】

『アヌヨーガドゥヴァーラ・チュールニ』

ADC on ADS 435-439 (p.497): akṣa ity ātmā indriyāṇi vā, taṃ tāni vā prati vartate yat tat pratyakṣam /

【アバヤデーヴァ・スーリ】

『バガヴァティー・ヴリッティ』

BhSV on BhS 5.4.193 (f.222b): paccakkhetti akṣaṃ jīvam akṣāṇi vendriyāṇi prati gataṃ pratyakṣam /

『スターナーンガ・ヴリッティ』

SthAV on SthA 336 (p.447): tatra paccakkhe tti aśnāti aśnute vyāpnotīty arthān ity akṣaḥ ātmā, taṃ prati yad varttate jñānaṃ tat pratyakṣaṃ niścayato' vadhimanaḥparyāyakevalāni, akṣāṇi vendriyāṇi prati yat tat pratyakṣaṃ vyavahāratas tac cakṣurādiprabhavam iti /

『チュールニ』作者であるジナダーサは、Mehta［1967: 268］によればジナバドラ以後、ハリバドラ以前の論師であり、ヴィクラマ暦650－750年頃（593-693 ca.）がその生存年代と考えられている。また、彼の著作『ナンディースートラ・チュールニ』の末尾には、同作品がシャカ暦598年（676 ca.）に作成されたことが記されており[45]、彼が７世紀半ばに活躍した学僧であることは確実であろう。またアバヤデーヴァは、九つのアンガ文献にサンスクリット注を施した著名な僧であり、彼は11世紀後半に活躍したと考えられる[46]。いずれにせよ、『バーシャ』作者で最後期に属するジナバドラの生存年代（505-609 ca.）を鑑みるならば、彼ら白衣派の聖典注釈者のうち、両論併記を行った最初の人物はジナダーサであることは確実であると思われる。

また、上記の注釈類の注釈元の聖典にも注目しなければならない。ジナダーサの上記の記述の註釈元は、本稿第１節に紹介した『アヌヨーガドゥヴァーラスートラ』のプラマーナの分類に関わる箇所である。さらに、アヴァヤデーヴァの第１例の注釈元は、『バガヴァティースートラ』におけるプラマーナの４分類であり[47]、『アヌヨーガドゥヴァーラスートラ』と同じように直接知・推理・類推・証言を列挙する箇所である。また、『スターナーンガ・ヴリッティ』は、'heu'（*hetu）の４種類として、これら直接知などの４種を挙げる箇所[48]に対する注釈であり、プラマーナの分類ではないものの、同じ４種の認識型の分類と言える。すなわち、これらの例は、五知説は全く関与しない聖典テキストに対する注釈であり、「知」というタームによって統括される認識論とは異なる、他学派の影響を受けた新しい認識論の潮流に属するものと言えよう。

既に考察したように、『バーシャ』作者たちはあくまでも＜伝統的解釈＞に則り、「知」の分類を構築した。その中でもジナバドラのみは、＜過渡的解釈＞を鑑み、感官・マナスに基づく知を直接知に分類することに大きな貢献を為している。ただし、ジナバドラにとってもこのような努力は「知」の領域内で行われたことであり、'pratyakṣa' という語の派生説明については＜伝統的解釈＞を逸脱することはない。ヤショーヴィジャヤに見られるような 'akṣa' ＝ジーヴァ説と 'akṣa' ＝感官説を併記する試みは、「プラマーナ」というタームの元に認識論を全く新しく再編成する土壌から生まれたことは間違いない。このような試みは、＜伝統的解釈＞を堅持する『バーシャ』文献ではなく、『チュールニ』作者であるジナダーサを待たなければならなかったのである。

６．まとめ

以上の考察から以下のことが明らかとなった。

・ジナバドラは、聖典および先行『バーシャ』文献から＜伝統的解釈＞＜過渡的解釈＞のいずれをも継承している。

・サンガダーサによって ‘pratyakṣa’ という語の派生説明が開始されたが、ジナバドラは『ダートゥパータ』を用いてこれを文法的に裏付けた。

・ジナバドラを含む『バーシャ』作者たちは、‘akṣa’ ＝感官説を徹底的に批判し、認識の最終的な主体はどこまでもジーヴァであるとした。

・ジナバドラは「究極的」「世間的」という二分法を導入し、「感官・マナスに基づく知」についてもそれを「直接知」に分類する先鞭をつけた。

・‘akṣa’ ＝ジーヴァ説と ‘akṣa’ ＝感官説の併記は、『チュールニ』作者であるジナダーサが嚆矢であり、両論併記は知の分類ではなくプラマーナの分類を試みた聖典テキストの注釈文献に限られる。

【略号および参考文献】

ADC: *Anuyogadvāracūrṇi* (Jinadāsagaṇi Mahattara); See ADS.

ADS: *Anuyogadvārasūtra*: Muni Jambuvijaya (ed.), *Anuyogadvārasūtram*. 2Vols., Jaina Āgama Series No. 18 (1,2), Bombay: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1999, 2000.

ADV: *Anuyogadvārasūtravṛtti* (Maladhāri Hemacandra): See ADS.

ĀN: *Āvaśyakaniryukti* (Bhadrabāhu): Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad-Āvaśyakasūtram*. 4Vols., Āgamodaya Samiti Series nos. 1-4, Mehesana, 1916-17.

ĀNAva: *Āvaśyakaniryuktyavacūrṇi* (Jñānasāgara Sūri): Śrī Mānavijaya (ed.), *Śrīharibhadrasūrikṛtavṛtty anusāreṇa Bhaṭṭārakaśrījñānasāgarasūriviracitā Śrutakevaliśrībhadrabāhusvāmisūtritaniryuktiy uta Śrī Āvaśyakaniryukter Avacūrṇiḥ*. 2Vols. Śreṣṭhi Devacandra Lālbhāī Jainapustakoddhāre Granthāṅka 108, Surat: Śreṣṭhi Devacandra Lālbhāī Jainapustakoddhāra Fund, 1965.

ĀNMV: *Āvaśyakaniryuktivṇtti* (Malayagiri): *Śrī Āvaśyakasūtram*. Vol.I. Śrī Āgamodayasamiti Series #56, Bombay-Surat: Āgamodayasamiti, 1928

Balcerowicz, Piotr

[2001] *Jaina Epistemology in Historical and Comparative Perspective*. 2Vols., Alt- und Neu-Indische Studien 53, 1-2, Stuttgart: Franz Steiner Verlag.

BKBh: *Bṛhatkalpabhāṣya* (Saṅghadāsa Gaṇi): (a) Muni Caturvijaya & Muni Puṇyavijaya (eds.), *Bṛhatkalpasūtram*. 6 Vols., Ātmānanda Jaina Grantha Ratnamālā, Nos. 82, 83, 84, 87, 88, 90, Bhavnagar: Jaina Ātmānanda Sabhā, 1942 (Reprint, 2002).; (b) Willen B. Bollée (ed.), *Bhadrabāhu Bṛhatkalpaniryukti and Sanghadāsa Bṛhatkalpabhāṣya: Romanized and Metrically Revised Version, Notes from Related Texts and a Selective Glossary*. 3 Vols., Beiträge zur Südasienforschung Südasien-Institut Universität Heidelberg Band 181, 1-3, Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1998.

BhS: *Bhagavatīsūtra*: Ānandasāgara Sūri (ed.), *Śrīmad Bhagavatīsūtram*. 3Vols., Āgamodaya Samiti Series nos.12, 13, 14, Mehesana, 1918-21.

BhSV: *Bhagavatīsūtravṛtti* (Abhayadeva Sūri): See BhS.

DhātuP: *Dhātupāṭha*: Otto Böhtlingk (ed.), *Pāṇini 's Grammatik*. Leipzig, 1887 (Reprint: Hildesheim: Georg Olms Verlagsbuchhandlung, 1964.).

Dulaharāj, Muni and Kusumaprajñā, Samaṇ

[1996] "Vyavahār Bhāṣya: Ek Anuśīlan." In *Vyavahārabhāṣya*. See VyBh.

DVBh: *Daśavaikālikabhāṣya*: See DVS.

DVS: Daśavaikālikasūtra (Śyyaṃbhava): Ānandasāgara Sūri (ed.), Śrī-Daśavaikālikasūtram. Devacandra Lālbhai Jainapustakoddhāra Fund Series no. 47, Bombay, 1918.

Hattori, Masaaki（服部正明）

[1968] *Dignāga, On Perception, being the Pratyakṣapariccheda of Dignāga 's Pramāṇasamuccaya from the Sanskrit Fragments and the Tibetan Versions*. Cambridge: Harvard University Press.

JKBh: *Jītakalpabhāṣya* (Jinabhadra Gaṇi): Muni Puṇyavijaya (ed.), *Pūjyaśrī Jinabhadragaṇi Kṣamāśramaṇaviracitaṃ Jītakalpasūtram: Svopajñabhāṣyeṇa Bhūṣitam*. Ahmedabad: Bhāīśrī Babalacaṃdra Keśavalāl Modī, Vikrama Saṃvat 1994.

JSV: *Jīvasamāsavivaraṇa* (Maladhāri Hemacandra). Śīlacandravijaya Gaṇi (ed.), Śrī *Śrutadharamaharṣibhir viracitaṃ Maladhāri Śrīhemacandrasūriviracitavivaraṇopetaṃ Śrī Jīvasamāsaprakaraṇam*. Śrī Neminandana Granthamālā 15, Khambat: Śrī Jaina Grantha Prakāśana Samiti, 1994.

JTBh: *Jainatarkabhāṣā* (Yaśovijaya Gaṇi): Sukhlal Sanghavi, Mahendra Kumar Shastri, and Dalsukh Malvania (eds.), *Jaina Tarka Bhāṣā of Mahopādhyāya Śrī Yaśovijaya Gaṇi with Tātparyasaṅgraha*. Singhi Jain Series No.8, Ahmedabad-Calcutta: Singhi Jaina Granthamālā, 1938.

Malvania, Dalsukh

[1949] "Prastāvanā: Āgama Yugakā Jain Darśan." In *Nyāyāvatāravārtikavṛtti of Śrī Śānti Sūri*. Singhi Jain Series 20, Bombay: Singhi Jain Śāstra Śikṣāpīṭha.

Mehta, Mohanlāl

[1967] *Jain Sāhitya kā Bṛhad Itihās: Bhāga 3, Āgamika Vyākhyāeṃ*. Varanasi: Pārśvanāth Vidyāśram Śodh Saṃsthān.

LT: *Laghīyastraya* (Akalaṅka Deva): Mahendra Kumār Śāstri (ed.), *Akalaṅkagranthatrayam*. Singhi Jain Series No.12, Ahmedabad-Calcutta: Siṅghi Jaina Granthamālā, 1939.

LTSV: *Laghīyastrayasvopajñavṛtti* (Akalaṅka Deva): See LT.

NAṬ: *Nyāyāvatāraṭippaṇa* (Devabhadra): P. L. Vaidya (ed.), *Nyāyāvatāra of Siddhasena Divākara with the Vivṛti of Siddharṣigaṇi and with the Ṭippaṇa of Devabhadra*. Bombay: Shri Jain Swetamber Conference, 1928.

NS: *Nandīsūtra* (Devavācaka): Muni Puṇyavijaya, Dalsukh Malvania, Amṛtlāl Mohanlāl Bhojak (eds.), *Nandīsuttaṃ and Aṇuogaddārāiṃ*. Jaina Āgama Series no.1, Bombay: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 1968.

NSC: *Nandīsūtracūrṇi* (Jinadāsagaṇi Mahattara): Muni Puṇyavijaya (ed.), *Nandīsuttaṃ by Devavācaka with the Cūrṇi by Jinadāsa Gaṇi Mahattara*. Prakrit Text Society Series No.9,

Varanasi-Ahmedabad: Prakrit Text Society, 1966.

NSHV: *Nandīsūtravṛtti* (Haribhadra Sūri). Muni Puṇyavijaya (ed.), *Nandīsūtraṃ by Śrī Devavācaka with the Vṛtti by Śrī Haribhadrācārya and Durgapadavyākhyā on Vṛtti by Śrīcandrācāya and Viṣamapadaparyāya on Vṛtti*. Prakrit Text Society Series No.10, Varanasi-Ahmedabad: Prakrit Text Society, 1966.

NSMV: *Nandīsūtravṛtti* (Malayagiri). *Śrīman-Malayagiryācāryavihita-Vivaraṇayutaṃ Śrīmad-Devavācakagaṇi-dṛbdhaṃ Śrīman-Nandīsūtram*. Śrī Āgamodayasamiti Series #16, Surat: Āgamodayasamiti, 1917.

PBh: *Praśastapādabhāṣya* (Praśastapāda): Vindhyesvari Prasad Dvivedin (ed.), *Tha Praśastapāda Bhāṣya with Commentary Nyāyakandalī of Śrīdhara*. Banaras, 1895 (Reprint: Delhi: Sri Satguru Publications, 1984).

Puṇyavijaya, M., Malvania, D. and Bhojak, A. M.

[1968] "Introduction." *In Nandisuttam and Aṇuogaddārāiṃ*. See NS.

Sato, Koju（佐藤宏宗）

[2005] "An Etymological Explanation of '*Pratyakṣa*' in Late Jainism." 『長崎法潤博士古希記念論集 仏教とジャイナ教』、京都：平楽路書店。pp.[69]-[90].

SAS: *Sarvārthasiddhi* (Pūjyapāda): Pt. Phoolchandra Shastri (ed.), *Sarvārthasiddhi*. Jñānapīṭha Mūrtidevī Granthamālā; Sanskrit Grantha No. 13, Delhi: Bhāratīya Jñānapīṭha, 1989 (4th edition).

SthA: *Sthānāṅga*: Muni Jambūvijaya (ed.), *Śrī Sthānāṅgasūtram*. 3 Vols., Jaina Āgama Series No. 19 (1, 2, 3), Mumbai: Śrī Mahāvīra Jaina Vidyālaya, 2002-2003.

SthAV: *Sthānāṅgavṛtti* (Abhayadeva): See SthA.

TAS: *Tattvārthasūtra* (Umāsvāti): Hiralal Rasikdas Kapadia (ed.), *Tattvārthādhigamasūtra, Part I*. Devacandra Lālbhai Jainapustakoddhāra Fund Series no.67, Bombay, 1926.

Uno, Atsushi（宇野惇）

[1965]「ジャイナ教知識論の一考察―「認識」の概念の発展―」『密教学』第１号、pp.168-190.

VĀBh: *Viśeṣāvaśyakabhāṣya* (Jinabhadra Gaṇi): Dalsukh Malvania (ed.), *Ācārya Jinabhadra's Viśeṣāvaśyakabhāṣya with Auto-commentary*. 3Vols., L. D. Series, nos. 10, 14, 21, Ahmedabad, 1966-68.

VĀBhBV: *Viśeṣāvaśyakabhāṣyabṛhadvṛtti* (Maladhāri Hemacandra): *Śrījinabhadragaṇikṣamāśramaṇa-pādaviracitam Viśeṣāvaśyakabhāṣyam / Maladhāriśrīhemacandrasūriviracitayā śiṣyahitānāmnyā Bṛhadvṛttyā vibhūṣitam*. Śrī Yaśovijaya Jaina Granthamālā, nos. 25, 27, 28, 31, 33, 35, 37, 39, Benares, 1911-15. (Reprint. Bhuvanabhānu Sūri, ed. Viśeṣāvaśyakabhāṣya. 2Vols. Reprint. Mumbai: Divya Darśan Trust, 1982.)

VĀBhSV: *Viśeṣāvaśyakabhāṣyasvopajñavṛtti* (Jinabhadra Gaṇi): See VĀBh.

VyBh: *Vyavahārabhāṣya:* Samaṇī Kusumaprajñā (ed.), *Vyavahārabhāṣya: Original Text, Variant Readings, Critical Notes, Niryukti, Preface and Various Appendixes*. Ladnun: Jain Vishva Bharati Institute, 1996.

＊本稿は平成年度科学研究費補助金・基盤研究（C）による研究成果の一部である。連携研究者の佐藤宏宗博士（東方研究会・研究員）には、本補助金による研究会開催・運営に関して多大なご協力を頂

いた。さらに、佐藤博士および研究協力者の小林久泰博士（日本学術振興会・特別研究員）、川尻洋平博士（筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所・客員研究員）には、研究会において数々の助言と貴重な示唆を頂いた。また、研究協力者の藤永伸博士（都城工業高等専門学校・教授）には『ジータカルパ・バーシャ』の読解についてご協力頂いた。ここに記して謝意を表したい。

[1] JTBh, p.2, 7-9.: akṣam indriyaṃ pratigatam kāryatvenāśritaṃ pratyakṣam, atha vāśnute jñānātmanā sarvārthān vyāpnotīty auṇādikanipātanāt akṣo jīvaḥ taṃ pratigataṃ pratyakṣam /

[2] 佐藤[2005: 71-73]を参照せよ。

[3] テキストの形式上は、アカランカ→デーヴァスーリ→ヤショーヴィジャヤという継承順が想像できる。LT v.3ab: pratyakṣaṃ viśadaṃ jñānaṃ mukhyasaṃvyavahārataḥ /; LTSV on v.4: tatra sāṃvyavahārikam indriyānindriyapratyakṣam / mukhyam atīndriyajñānam /; PNT2.4: tad dviprakāraṃ sāṃvyavahārikaṃ pāramārthikaṃ ca /; JTBh, p.2, 13: pratyakṣaṃ dvividham ---- sāṃvyavahārikam, pāramārthikaṃ ceti /

[4] Malvania[1949: 62]および宇野（惇）[1965: 174]を参照せよ。

[5] ジナバドラ以降の論理期に属する独立作品における ‘pratyakṣa’ の派生説明については本稿では取り扱わない。ジナバドラからヤショーヴィジャヤに至る論理期作品の派生説明については、既に佐藤[2005]において網羅的に研究されているので参照されたい。

[6] 五知の訳語については、従来「感官知」「聖典知」「直観知」「他心知」「独存知」が一般的である。ただし、ジナバドラは ‘mati’ と ‘śruta’ の区別について次のように言う。Cf. VĀBhSV on v.99: iha yad indriyamanonimittam ātmano vijñānaṃ śrutagranthānusāreṇāvirbhavati tad arthābhidhānasamarthaṃ ca tat śrutam, śeṣam indriyamanonimittaṃ vijñānaṃ matir iti /（感官とマナスを原因とし、言葉や書物に従ってアートマンに知が生じるが、この［知］はその意味を［他者に］指し示すことの出来る言語［知］（śruta[-jñāna]）である。残りの感官とマナスを原因とする知は、非言語［知］（mati[-jñāna]）である。）このように ‘mati’ と ‘śruta’ は、「言葉や書物に従う」（śrutagranthānusāreṇa）という点によって区別されるものであり、感官とマナスを原因とする点では相違はない。したがって、感官とマナスを原因とする知のうち、「言語に従うもの」を ‘śruta’、「言語に従わないもの」を ‘mati’ と理解することができる。いずれにせよ、「感官とマナスを原因とする」‘mati’ を「感官知」と訳すること、単に聖典だけでなく広く「言語」に関わる ‘śruta’ を「聖典知」と訳することは本来の意図にそぐわないと考えられる。これらの訳語の詳細な検討については将来の課題とし、本稿では暫定的に ‘mati’ を「非言語知」、‘śruta’ を「言語知」とする。

[7] Malvania[1949: 59]には、詳細な分類表が掲載されているので参照されたい。なおこの分類は以下のテキストに基づいている。See SthA 60: duvihe nāṇe pannatte, taṃ jahā paccakkhe ceva parokkhe ceva / paccakkhe nāṇe duvihe pannatte, taṃ jahā kevalanāṇe ceva ṇokevalanāṇe ceva / ---- / ṇokevalaṇāṇe duvihe pannatte, taṃ jahā ohiṇāṇe ceva maṇapajjavaṇāṇe / ---- / parokkhe ṇāṇe duvihe pannatte, taṃ jahā ābhiṇibohiyaṇāṇe ceva suyanāṇe ceva / [Skt.: dvividham jñānaṃ prajñaptam / tad yathā pratyakṣaṃ caiva parokṣaṃ caiva / pratyakṣaṃ jñānam dvividhaṃ prajñaptam, tad yathā kevalajñānaṃ caiva nokevalajñānaṃ caiva / ---- / nokevalajñānaṃ dvividhaṃ prajñaptam, tad yathā

avadhijñānaṃ caiva manaḥparyāyajñānam / --- / parokṣaṃ jñānaṃ dvividhaṃ prajñaptam, tad yathā ābhinibodhikajñānaṃ caiva śrutajñānaṃ caiva /].

[8] この分類はジャイナ教において初めて梵語による独立作品を著したウマースヴァーティにも認められている。Cf. TAS I.11-12: ādye parokṣam // 11 // pratyakṣam anyat // 12 //: TABh on I.11-12: tad evam ādye matijñānaśrutajñāne parokṣaṃ pramāṇaṃ bhavataḥ /; matiśrutābhyāṃ yad anyat trividhaṃ jñānaṃ tat pratyakṣaṃ pramāṇaṇ bhavati /.

[9] Malvania[1949: 61], Puṇyavijaya, etc.[1968: 38]の分類表を参照せよ。分類の根拠となるテキストは次の通り。See NS 10-12, 43: se kiṃ taṃ paccakkhaṃ paccakkhaṃ duvihaṃ paṇṇattaṃ / taṃ jahā iṃdiyapaccakkhaṃ ca ṇoiṃdiyapaccakkhaṃ ca // 10 //; se kiṃ taṃ iṃdiyapaccakkhaṃ iṃdiyapaccakkhaṃ paṃcavihaṃ paṇṇattaṃ / taṃ jahā soiṃdiyapaccakkhaṃ cakkhiṃdiyapaccakkhaṃ ghāṇiṃdiyapaccakkhaṃ rasaṇeṃdiyapaccakkhaṃ phāsiṃdiyapaccakkhaṃ / se taṃ iṃdiyapaccakkhaṃ // 11 //; se kiṃ taṃ ṇoiṃdiyapaccakkhaṃ ṇoiṃdiyapaccakkhaṃ tivihaṃ paṇṇattaṃ / taṃ jahā ohiṇāṇapaccakkhaṃ maṇapajjavaṇāṇapaccakkhaṃ kevalaṇāṇapaccakkhaṃ // 12 //; se kiṃ taṃ parokkhaṃ parokkhaṃ duvihaṃ paṇṇattaṃ / taṃ jahā ābhiṇibohiyaṇāṇaparokkhaṃ ca suyaṇāṇaparokkhaṃ ca // 43 // [Skt.: atha kiṃ tad pratyakṣam, pratyakṣaṃ dvividhaṃ prajñaptam / tad yathā indriyapratyakṣaṃ ca noindriyapratyakṣaṃ ca //; atha kiṃ tad indriyapratyakṣam, indriyapratyakṣaṃ pañcavidhaṃ prajñaptam / tad yathā śrotrendriyapratyakṣaṃ cakṣurindriyapratyakṣaṃ ghrāṇendriyapratyakṣaṃ rasanendriyapratyakṣaṃ sparśendriyapratyakṣaṃ / tad etad indriyapratyakṣam //: atha kiṃ tad noindriyapratyakṣam, noindriyapratyakṣaṃ trividhaṃ prajñaptam / tad yathā avadhijñānapratyakṣaṃ manaḥparyāyajñānapratyakṣaṃ kevalajñānapratyakṣam //: atha kiṃ tad parokṣam, parokṣaṃ dvividhaṃ prajñaptam / tad yathā ābhinibodhikajñānaparokṣaṃ ca śrutajñānaparokṣaṃ ca //]

[10] ADS 436-439: se kiṃ taṃ ṇāṇaguṇappamāṇe, ṇāṇaguṇappamāṇe cauvvihe paṇṇatte / taṃ jahā paccakkhe aṇumāṇe ovamme āgame // 436 //; se kiṃ taṃ paccakkhe, paccakkhe duvihe paṇṇatte / taṃ jahā iṃdiyapaccakkhe ya ṇoiṃdiyapaccakkhe ya // 437 //; se kiṃ taṃ iṃdiyapaccakkhe, iṃdiyapaccakkhe paṃcavihe paṇṇatte / taṃ jahā soiṃdiyapaccakkhe cakkhuriṃdiyapaccakkhe ghāṇiṃdiyapaccakhhe jibbhiṃdiyapaccakkhe phāsiṃdiyapaccakkhe / se taṃ iṃdiyapaccakkhe // 438 //; se kiṃ taṃ ṇoiṃdiyapaccakkhe, ṇoiṃdiyapaccakkhe tivihe paṇṇatte / taṃ jahā ohiṇāṇapaccakkhe maṇapajjavaṇāṇapaccakkhe kevalaṇāṇapaccakkhe / se taṃ ṇoiṃdiyapaccakkhe / se taṃ paccakkhe // 439 // [Skt.: atha kiṃ tad jñānaguṇapramāṇam, jñānaguṇapramāṇaṃ caturvidhaṃ prajñaptam / tad yathā pratyakṣam anumānam aupamyam āgamaḥ //; atha kiṃ tad pratyakṣam, pratyakṣaṃ dvividhaṃ prajñaptam / tad yathā indriyapratyakṣaṃ ca noindriyapratyakṣaṃ ca //; atha kiṃ tad indriyapratyakṣam, indriyapratyakṣaṃ pañcavidhaṃ prajñaptam / tad yathā śrotrendriyapratyakṣaṃ cakṣurindriyapratyakṣaṃ ghrāṇendriyapratyakṣaṃ jihvendriyapratyakṣaṃ sparśendriyapratyakṣam / tad etad indriyapratyakṣam //; atha kiṃ tan noindriyapratyakṣam, noindriyapratyakṣaṃ trividhaṃ prajñaptam / tad yathā avadhijñānapratyakṣaṃ manaḥparyāyajñānapratyakṣaṃ kevalajñānapratyakṣam / tad etan noindriyapratyakṣam / tad etat pratyakṣam //].

[11] Puṇyavijaya, etc.[1968: 42-45]によれば、『ナンディー』の作者デーヴァヴァーチャカの下限はヴィクラ

マ暦523年（466年）であり、同[1968: 70-72]によれば『アヌヨーガドゥヴァーラ』の成立はヴィクラマ暦357年（300年）以前である。

[12] Mehta[1967: 123]によれば、サンガダーサ・ガニは『ブリハットカルパ・バーシャ』『パンチャカルパ・マハーバーシャ』の作者であり、ジナバドラ（505-609. ca.）に先行する。またMehta氏は『ヴャヴァハーラ・バーシャ』の作者もジナバドラ以前としている（Mehta[1967: 124-125].）。Duraharāj, etc.[1996: 45, 107]は、サンガダーサは５世紀から６世紀の人物であり、やはりジナバドラ以前とする。

[13] BKBh 30: ohi maṇapajjave yā kevalanāṇaṃ ca hoti paccakkhaṃ / ābhiṇibohiyanāṇaṃ suyanāṇaṃ ceva pārokkhaṃ // [Skt.: avadhi manaḥparyāyaṃ ca kevalajñānaṃ ca bhavati pratyakṣam / ābhinibodhikajñānaṃ śrutajñānaṃ caiva parokṣam //]

[14] VĀBh 88cd: etthaṃ ca matisutāiṃ parokkham itaraṃ ca paccakkhaṃ // [Skt.: atra ca matiśrute parokṣam itarac ca pratyakṣam //]

[15] Mehta[1967: 124]は、『ヴャヴァハーラ・バーシャ』の作者は不明とするが、Duraharāj, etc.[1996: 44, 106]は、『ヴャヴァハーラ・バーシャ』と『ブリハットカルパ・バーシャ』の作者は同一人物であり、サンガダーサ・ガニであるとする。

[16] VyBh 4030: paccakkho vi ya duviho iṃdiyajo ceva no va iṃdiyajo / iṃdiyapaccakkho vi ya paṃcasu visaesu neyavvo // [Skt.: pratyakṣo 'pi ca dvividho indriyajaś caiva naivendriyajaḥ / indriyapratyakṣo 'pi ca pañcasu viṣayeṣu jñātavyaḥ //]. Cf. JKBh v.10: pacchakkho vi ya duviho iṃdiyajo ceva noyaiṃdiyajo / iṃdiyapaccakkho vi ya paṃcasu visaesu ṇāyavvo //. VyBhの編者Kusumaprajñāは当該韻文を『ヴィヤヴァハーラ・ニルユクティ』と考えている。バドラバーフの『ニルユクティ』の成立は付加の繰り返しにより複雑な過程をたどるが、『バーシャ』作者はそれまでに『ニルユクティ』として成立していた韻文に『バーシャ』韻文を新たに付加することによって注釈を施している。その際、当該聖典に対する『ニルユクティ』韻文や他聖典に対する『ニルユクティ』韻文も、自己の『バーシャ』の一部として取り込んでしまうことがしばしばであり、我々が『ニルユクティ』韻文と『バーシャ』韻文とを厳密に区別することには、非常な困難を伴う。これは特に『ブリハットカルパ』『ヴャヴァハーラ』『ニシーハ』などについて顕著であり、『ニルユクティ』韻文の抽出は後代の散文注釈の導入文に “ṇijjuttigāhā” “cirantanagāthā” などの記載があるか否かに頼らなければならない。いずれにせよ、Kusumaprajñāが当該韻文を『ニルユクティ』とした直接的な根拠は不明であり、本稿ではこれを『バーシャ』として扱っておくこととする。Cf. Duraharāj, etc.[1996: 38-42, 100-104].

[17] BKBh v.25: jīvo akkho taṃ pai jaṃ vaṭṭati taṃ tu hoi paccakkhaṃ / parato puṇa akkhassā vaṭṭaṃtaṃ hoi pārukkhaṃ // 25 // [Skt.: jīvo ' kṣas taṃ prati yad varttate tat tu bhavati pratyakṣam / parataḥ punar akṣasya varttamānaṃ bhavati parokṣam //]. Cf. JKBh v.11: jīvo akkho taṃ pati jaṃ vaṭṭai taṃ tu hoti paccakkhaṃ / parao puṇa akkhassā vaṭṭaṃtaṃ hoi pārokkhaṃ //.『ニャーヤーヴァターラ・ティッパナ』の作者デーヴァバドラは、当該の韻文を皮切りに四つの韻文、すなわちBKBh vv.25-28を “tathā ca bhagavān bhadrabāhuḥ” と導入して引用している（See NAṬ, p.15.）。デーヴァバドラの言明に従うならば、これらの韻文がバドラバーフによる『ニルユクティ』である可能性が残るが、『ブリハットカルパ』に関しても『ニルユクティ』韻文とそれに付加された『バーシャ』韻文を厳密に区

別することは困難である。BKBhの編者であるCaturvijayaとPuṇyavijayaは『ブリハットカルパ』に対する散文注釈者たちが名指しで韻文を導入しているものを抜粋し、『ニルユクティ』と考えられる韻文のリストを、BkBh, Vol.6に付録４（Caturtaṃ Pariśiṣṭam）として掲載している。しかし、当該のvv.25-28はこのリストには含まれていないことから、本稿ではこれらを『バーシャ』として扱う。Balcerowicz[2001: 174]は、デーヴァバドラがこれらの韻文を間違ってバドラバーフ作として引用していると指摘している。ただしBalcerowicz氏は、これらの韻文がBKBhであると同定出来ておらず、BKBh刊本も参照していないようである。

[18] JKBh vv.12-13: asu vāvaṇa dhāūo akkho jīvo u bhaṇṇae ṇiyamā / jaṃ vāvayae bhāve ṇāṇeṇaṃ teṇa akkho tti // 12 // asa bhoyaṇammi aha vā savvadavvāṇi bhogam etasya / āgacchaṃtī jamhā pālei ya teṇa akkho tti // 13 // [Skt.: aśū vyāpane dhātor akṣo jīvas tu bhaṇyate niyamāt / yo vyāpnoti bhāvān jñānena tenākṣa iti // aśa bhojane atha vā sarvadravyāṇi bhogyam etasya / āgacchanti yasmāt pālayati ca tenākṣa iti //].

[19] DhātuP 5.18: aśū vyāptau saṃghāte ca /; Ibid. 9.51: aśa bhojane /

[20] VĀBh v.89: jīvo akkho atthavvāvaṇabhoyaṇaguṇaṇṇito jeṇaṃ / taṃ pati vaṭṭati ṇāṇaṃ jaṃ paccakkhaṃ tayaṃ tividhaṃ // [Skt.: jīvo ’ kṣo ’ rthavyāpanabhojanaguṇānvitaḥ yena / taṃ prati varttate jñānaṃ yat pratyakṣaṃ tac ca trividham //].

[21] See VĀBh v.2048ab: vijñānāto ’ ṇaṇṇo viṇṇāṇaghaṇo tti savvaso vāvi / [Skt.: vijñānād ananyo vijñānaghana iti sarvato vyāpī /]; VĀBhSV on v.2048: jñānadarśanopayogarūpaṃ vijñānam / tato ’ nanyatvād ātmā vijjānaghanaḥ, atha vā pratipradeśam anantavijñānaparyāyasaṃghātātmakatvād vijñānaghanaḥ /.

[22] See VĀBh v.2024ab: botthā dehādīṇaṃ bhojjattaṇato ṇaro vva bhattassa / [Skt.: bhoktā dehādīnāṃ bhogyatvato nara iva bhaktasya /]; VĀBhSV on v.2024: vidyamānabhoktṛkam idaṃ śarīrādi bhogyatvāt / iha yad bhogyaṃ tad vidyamānabhoktṛkaṃ dṛṣṭam, yathāhāravastrādi / yac cāvidyamānabhoktṛkaṃ na tad bhogyaṃ yathā kharaviṣāṇam / yaś caiṣāṃ śarīrādīnāṃ bhoktā sa jīvaḥ / tasmād astīti /. ただし、ジーヴァの享受主体性の論証は『ダシャヴァイカーリカ・バーシャ』においても展開されている。Cf. DV Bh v.15ab: deho sabhottio khalu bhojjattā oyaṇāithālaṃ va / [Skt.: deho sabhoktṛkaḥ khalu bhogyatvād odanādisthālam iva /].

[23] 空衣派のプージャパーダも ‘akṣa’ という語について考察を加えており、ジャイナ教内において ‘pratyakṣa’ という語の派生説明を開始したのが、サンガダーサであると言い切ることは出来ない。ただし、プージャパーダも『ダートゥパータ』にまでは言及しておらず、ジナバドラが文法的解釈について果たした役割は大きいと言わねばならない。なお、ジナバドラとプージャパーダの前後関係については不明である。Cf. SAS on TAS I.12: akṣṇoti vyāpnoti jānātīty akṣa ātmā / tam eva prāptakṣayopaśamaṃ prakṣīṇāvaraṇaṃ vā pratiniyataṃ pratyakṣam /.

[24] ジナバドラの派生説明に従う白衣派論者たちは数多いが、「行き渡る」「享受する」という動詞語根の意味にまで言及する聖典注釈者たちは以下の通りである（なお、ジナバドラ作品に対する注釈は割愛し、

またテキスト本文は省略する)。(１) ジナダーサガニ・マハッタラ：NSC, p.14、(２) ハリバドラ・スーリ：NSHV, p.20、(３) アバヤデーヴァ・スーリ：SthAV on SthA 60, p.81 (VĀBh v.89-90を引用)、(４) マラダーリ・ヘーマチャンドラ：ADV on ADS 435-439, p.498; JSV on v.141, p.119 (５) マラヤギリ：BKBhV on v.25; NSMV on NS 2, f.71b (VĀBh v.89を引用); ĀNMV on ĀN1, f.13b (６) ジュニャーナサーガラ・スーリ：ĀNAva on ĀN1, f.11b.

[25] BKBh v.26: kesiṃci iṃdiyāiṃ akkhāiṃ taduvaladdhi paccakkhaṃ / taṃ tu na jujjai jamhā aggāhagam iṃdiyaṃ visae // [Skt.: keṣāṃcid indriyāṇy akṣāni tadupalabdhiḥ pratyakṣam / tat tu na yujyate yasmād agrāhakam indriyaṃ viṣaye //]. Cf. JKBh v.14: kesiṃci iṃdiyāiṃ akkhāiṃ taduvaladdhi paccakkhaṃ / taṃ tu ṇa jujjati jamhā aggāhagam iṃdiyaṃ visae //

[26] BKV on v.26: keṣāñcid vaiśeṣikādīnām /

[27] プラシャスタパーダの派生説明は以下の通り。Cf. PBh, p.186: tatrākṣam akṣaṃ pratītyotpadyate iti pratyakṣam / akṣāṇīndiryāṇi ghrāṇarasanacakṣustvakchrotramanāṃsi ṣaṭ /. ディグナーガの派生説明についてはHattori[1968: 77]、佐藤[2005: 77-78]などを参照されたい。

[28] VĀBh v.91: kesiṃci indiyāiṃ akkhāiṃ taduvaladdhipaccakkhaṃ / taṃ ṇo tāiṃ jamacetaṇāiṃ jāṇaṃti ṇa ghaḍo vva // 91 // [Skt.: keṣāṃcid indriyāṇy akṣāṇi tadupalabdhiḥ pratyakṣam / tad na tāni yad acetanāni jānanti na ghaṭa iva //]

[29] See JKBh v.15: rūvādivisayāṇaṃ jīvo khalu iṃdiehiṃ uvalabhago / jamhā matammi jīve ṇa iṃdiyā uvalabhe visayaṃ // 15 // [Skt.: rūpādiviṣayāṇāṃ jīvo khalu indriyair upalaṃbhakaḥ / yasmād mṛte jīve nendriyāni upalabhante viṣayam //]. (「実にジーヴァこそが諸々の感官によって色かたちなどの対象を認識する主体である。なぜなら、ジーヴァが死んでいる場合には、感官は対象を認識することがないからである。」)

[30] BKBh v.27: na vi iṃdiyāiṃ upaladdhimaṃti vigatesu visayasaṃmaraṇā / jaha gehagavakkhāiṃ jo aṇusariyā sa uvaladdhā // 27 // [Skt.: nāpīndriyāṇy upalabdhimanti vigateṣu viṣayasaṃsmaraṇāt / yathā gehagavākṣādi yo ' nusmarttā sa upalabdhā //]; DVBh v.39: na u iṃdiyāiṃ uvaladdhimaṃti vigaesu visayasaṃbharaṇā / jaha gehagavakkhehiṃ jo aṇusariyā sa uvaladdhā //.

[31] Cf. VĀBh v.92: uvaladdhā tatthātā tavvigame taduvaladdhasaraṇāto / gehagavakkhovarame vi taduvaladdhāṇusaritā vā // 92 // [Skt.: upalabdhā tatrātmā tadvigame tadupalabdhasmaranāt / gehagavākṣoparame ' pi tadupalabdhānusmarttā iva //]. (この場合、【主張】認識者はアートマンである。【証因】それら（諸感官）が損なわれても、それらを通じて認識された対象を想起することがあるから。【喩例】家の丸窓が閉じられていても、それ（丸窓）を通じて認識された対象を想起する人のように。)；VĀBh vv.2112-3: bhūtindiyovaladdhāṇusaraṇato tehi bhiṇṇarūvassa / cetā paṃcagavakkhovaladdha-purisassa vā sarato // 2112 // taduvarame vi saraṇato tavvāvāre vi ṇovalaṃbhāto / indiyabhiṇṇassa matī paṃcagavakkhāṇubhaviṇo vva // 2113 // [Skt.: bhūtendriyopalabdhānusmaraṇatas tebhyo bhinnarūpasya / cetanā pañcagavākṣopalabdhapuruṣasyeva smarataḥ // taduparame ' pi smaraṇatas tadvyāpāre ' pi nopalambhāt / indriyabhinnasya matiḥ pañcagavākṣānubhavina iva //]. (【主張】精神性

はそれら（物質や感官）とは異なる本質を持つ［ジーヴァ］の持つものである。【証因】物質や感官を通じて認識された対象を想起することがあるから。【喩例】五つの丸窓を通じて対象を認識した人間が想起するように。【主張】知は感官とは異なる［ジーヴァ］が持つものである。【証因１】それら（感官）が損なわれていても、想起することがあるから。【証因２】それら（感官）が機能していても、認識しないことがあるから。【喩例】五つの丸窓を通じて認識する人のように。）

[32] BKBh v.28: dhūmanimittaṃ nāṇaṃ aggimmiṃ liṃgiyaṃ jahā hoi / taha iṃdiyāiliṃgaṃ taṃ nāṇaṃ liṃgiyaṃ na kahaṃ // 28 // [Skt.: dhūmanimittaṃ jñānam agnau laiṅgikaṃ yathā bhavati / tathā indriyādiliṅgaṃ taj jñānaṃ laiṅgikaṃ na katham //]

[33] JKBh v.17: liṃgaṃ ciṃdha nimittaṃ kāraṇam egaṭṭhiyāiṃ eyāiṃ / jāṇāi iṃdiehiṃ jīvo dhūmeṇa aggiṃ vva // 17 // [Skt.: liṅgaṃ cihnaṃ nimittaṃ kāraṇam ekārthikāny etāni / jānātīndriyair jīvo dhūmenāgnim iva //]

[34] BKBh v.29: aparāyattaṃ nāṇaṃ paccakkhaṃ tiviham ohimāīyaṃ / jaṃ parato āyattaṃ taṃ pārokkhaṃ havai savvaṃ // 29 // [Skt.: aparāyattaṃ jñānaṃ pratyakṣaṃ trividham avadhyādikam / yat parato āyattaṃ tat parokṣaṃ bhavati sarvam //]

[35] JKBh v.18: evaṃ khu iṃdiehiṃ jaṃ najjai liṃgiyaṃ tayaṃ nāṇaṃ / tamhā siddhaṃ akkho na iṃdiyā paṃca soyāī // 18 // [Skt.: evaṃ khalu indriyair yat jānāti laiṅgikaṃ taj jñānam / tasmāt siddham akṣo nendriyāni pañcāni śrotrādīni //]

[36] VĀBh v.94: honti parokkhāiṃ maisuyāiṃ jīvassa paraṇimittāo / puvvovaladdhasaṃbandhasaraṇao vāṇumāṇaṃ va // 94 // [Skt.: bhavataḥ parokṣe matiśrute jīvasya paranimittāt / pūrvopalabdha-saṃbandhasmaraṇād vānumānam iva //]

[37] VĀBh v.95: egaṃteṇa parokkhaṃ liṃgiyam ohāiyaṃ ca paccakkhaṃ / iṃdiyamaṇobhavaṃ jaṃ taṃ saṃvavahārapaccakkhaṃ // 95 // [Skt.: ekāntena parokṣaṃ laiṅgikam avadhyādikaṃ ca pratyakṣam / indriyamanobhavaṃ yat tat saṃvyavahārapratyakṣam //]

[38] VĀBhSV on v.95: atra tu yad indriyamanobhir bāhyaliṅgapratyayam utpadyate tad ekāntenaivendriyāṇām ātmakaś(naś) ca parokṣam, anumānatvāt, dhūmād agnijñānavat / この言明の 'bāhyaliṅgapratyayam' という語は、「外部にある証相についての知」と理解する方が自然であるかもしれない。しかしながら、証相についての知、例えば煙の知は、感官が直接的に認識するものであり、アートマンおよび感官にとって間接知と言えないことになってしまう。テキストそのものが 'bāhyaliṅgipratyayam' である可能性もあるが、ここでは「外部にある証相に基づく知」とした。なおヘーマチャンドラの注釈でも、「火などを対象とする知」と理解しており、これを支持する。Cf. VĀBhBV on v.95: bāhye dhūmādau liṅge bhavaṃ laiṅgikaṃ yaj jñānaṃ tad ekāntenātmana indriyamanasāṃ cāsākṣātkāreṇopajāyamānatvād ekāntaparokṣam ---- indriyamanobhir gṛhīte bāhye dhūmādā (sic!: dhūmādau) liṅge 'gnyādiviṣayaṃ yaj jñānam utpadyate tad ekāntena parokṣam, indriyamanasām ātmanaś ca tadgrāhyārthasyaikāntena parokṣatvāt, iti bhāvaḥ /.

[39] VĀBhSV on v.95: yac cāvadhyādi tad ekāntenaiva pratyakṣam ātmanaḥ, aliṅgatvāt, indriyāṇām aliṅgajñānavat /

[40] VĀBhSV on v.95: yat punaḥ sākṣādindriyamanonimittaṃ tat teṣām eva pratyakṣam, aliṅgatvāt, ātmano 'vadhyādivat, na tv ātmanaḥ, ātmanas tu tat parokṣam eva, paranimittatvāt, anumānavat ity uktam / teṣām api ca tat saṃvyavahārata eva tat pratyakṣam, na paramārthataḥ /

[41] 佐藤[2005: 79-80]にもその可能性が指摘されている。ジナバドラによるこの二つのナヤについての言明は次の通り。Cf. VĀBh v.4315: lokavvavahāraparo vavahāro bhaṇati kālao bhamaro / paramatthaparo maṇṇati ṇecchaio paṃcavaṇṇo tti // [Skt.: lokavyavahāraparo vyavahāro bhaṇati kālako bhramaraḥ / paramārthaparo manyate naiścayikaḥ pañcavarṇa iti //]. (「世間的な活動［を暫定的に承認すること］を専らとするものが、世間的［ナヤ］(vyavahāra[-naya]) である。「蜂は黒い」と言うようなものである。真実の対象［を語ること］を専らとするものが、究極的［ナヤ］(naiścaiyika[-naya]) である。「蜂は五つの色を持つ」と考えるようなものである。」)

[42] VĀBhBV on v.95: dhūmādiliṅgād agnyādiviṣayalaiṅgikajñānasyendriyanimittatvābhāvāt, indriyaṃ hi pratyutpannakālamātrabhāvy eva vastu gṛhṇāti, liṅgāt tu vahnyādir arthas trikālaviṣayo 'py anumīyate / tasmāl laiṅgikaṃ jñānaṃ manonimittam eva bhavati, nendriyanimittam /

[43] VĀBhSV on v.95: tasmād yathendriyajñāna(naṃ) pratyakṣam apy uktaṃ matiśrutayoḥ parokṣavacanāt parokṣam iti gamyate tathā matiśrutaparokṣavacanād eva manonimittam anuktam api gamyate tadantarbhāva(vāt) parokṣam iti, aṣṭāviṃśatibhedatvāc ca mater iti, anyathāsyāpi ṣaṣṭhajñānaprasaṅgaḥ syād iti //

[44] 以上のジナバドラの貢献はアカランカ以降の論師に影響を与えたことは間違いないが、ヤショーヴィジャヤは世間的直接知の説明において「介在」という語を使用しており、ジナバドラの影響が顕著に窺われる。Cf. JTBh, p.2: tad dhīndriyānindriyavyavahitātmavyāpārasaṃpādyatvāt paramārthataḥ parokṣam eva, dhūmāt agnijñānavad vyavadhānāviśeṣāt /. (「というのも、それ（世間的直接知）は、感官と非感官（anindriya = manas）とが介在するアートマンの働きによって引き起こされるので、究極的な観点からすれば間接知に他ならないからである。」)

[45] See NSC, p.83: śakarājño paṃcasu varṣaśateṣu vyatikrāṃteṣu aṣṭanavaneṣu naṃdyadhyayanacūrṇī samāptā iti /.

[46] Mehta[1967: 366-367]によれば、アバヤデーヴァはヴィクラマ暦1120年（1063 ca.）から1128年（1071 ca.）にかけて四つのアンガに注釈を作成したと言われている。また、『パッターヴァリー』によれば彼はヴィクラマ暦1135年（1078 ca.）に亡くなったとされるが、これに従うならば彼の弟子であるマラダーリ・ヘーマチャンドラ（1070-1130 ca.）の生存年代と矛盾を来す。これら両者の生存年代についてはさらなる考察が必要であるが、少なくともアバヤデーヴァが１１世紀後半の人物であることは確実であろう。

[47] See BhS 5.4.Sūtra 193 (f.221b): se kiṃ taṃ pamāṇe, pamāṇe cauvvihe paṇṇātte, taṃ jahā ---- paccakkhe aṇumāṇe ovamme āgame / (Skt.: atha kiṃ tat pramāṇam, pramāṇaṃ caturvidham prajñaptam, tad

yathā ---- pratyakṣam anumānam aupamyam āgamaḥ /).

[48] See SthA 336.2, p.445: aha vā heū cauvvihe pannatte, taṃ jahā ---- paccakkhe aṇumāṇe ovamme āgame / [Skt.: atha vā hetuś caturvidhaḥ, tad yathā ---- pratyakṣam anumānam aupamyam āgamaḥ /].

（うの　ともゆき：日本語・日本文学科　准教授）